

「エミシ」と「エゾ」

1 「蝦夷」と「日本」

◆「エミシ」と「エゾ」。漢字では同じく「エゾ」と書くのに、なぜ、読み方が違うのでしょうか。

◆わが国にクニ（小国）が生まれたのは、弥生時代（前3世紀～後3世紀）のことでした。やがて、クニとクニの対立が激しくなり、勝った方が負けた方を従え、より大きなクニ（大国）に成長していきました。

◆中でも、近畿地方の大国「ヤマト政権」は中国大陸や朝鮮半島と交流し、進んだ文化を取り入れて、強大な勢力となりました。天皇を中心とする政治のしくみが整えられ、平城京（奈良時代）や平安京（平安時代）のような整然とした都が造られました。当時の人々が「日本」と言うときは、現在の西日本を思い浮かべていたのです。

◆この頃、現在の関東・東北地方は「東国」と呼ばれ、「日本」の外にあるものとされていました。農耕を営み、「日本」の人々と同じような生活をしているにもかかわらず、国民とは考えられていなかったのです。

「日本」の人々は、「東国」の人々が自分たちより遅れていると考え、差別の意味を込めて「エミシ」と呼びました。

◆奈良時代の末、都では土木工事や軍隊の増強を進めたため、財政が厳しくなっていました。そこで「エミシ」を「日本」に取りこみ、税を納めさせようとの提案が出され、大軍が送られることになりました。しかし「エミシ」軍は強く、一時は陸奥国（現在の青森県・岩手県・宮城県・福島県）の国府（地方の政治をおこなう役所）である

多賀城を焼き討ちにしたりしました。

◆平安時代に入ると、都は平安京（現在の京都）に移されました。桓武天皇は、坂上田村麻呂を征夷大將軍に任命し、「エミシ」を屈服させようとはしました。この田村麻呂の活躍で、岩手県の北部までが「日本」の中に組み入れられることになりました。しかし、さらに北には、まだ「日本」の支配に属さない人々がいました。これらの人々が「エゾ」と呼ばれたわけです。

◆郷土館では、「エミシ」の時代の遺跡である蛭沢遺跡（青森市）の出土品を展示しています。

・ロクロ製の素焼きの土器「土師器」

・「大」という墨書のある土師器

・炭化米

・土師器より高温で焼かれた「須恵器」

などが出土しています。また、一辺が10m以上もある大規模な竪穴住居も確認されています。村の長の住居でしょうか。あるいは、村の重要な会議を開くための建物なのでしょうか。



蛭沢遺跡のイメージ

2 「エミシ」から「エゾ」へ

◆平安時代も半ば過ぎた 11 世紀後半、後三条天皇は藤原摂関家に奪われていた政権の回復をめざし、政治改革に乗り出しました。後三条天皇は岩手県北部で止まっていた「日本」の領土を、さらに拡大しようとします。これにより現在の青森県も、日本国に含まれることになりました。

◆「蝦夷」という文字はそれまで、同じ日本民族の延長線にいる人々を指すものとされてきました。しかしこの頃から明確に、異民族として扱われる人々を意味するようになったのです。それは主として、後に「アイヌ」と呼ばれる人々を指していました。「蝦夷」の読み方も、「エミシ」から「エゾ」に変わり、これによって「蝦夷」という文字には、強烈的な差別意識が含まれるようになりました。

◆「日本」は「エゾ」に対し、ワシ羽・ラッコ皮・アザラシ皮などを納めるよう要求しました。平安時代末、奥州平泉ひらいずみの藤原氏は「エゾ」と積極的に交流し、北方の特産物を手に入れていました。やがて貴族から武家に政権が移っても、「エゾ」に対する「日本」の態度は変わりませんでした。

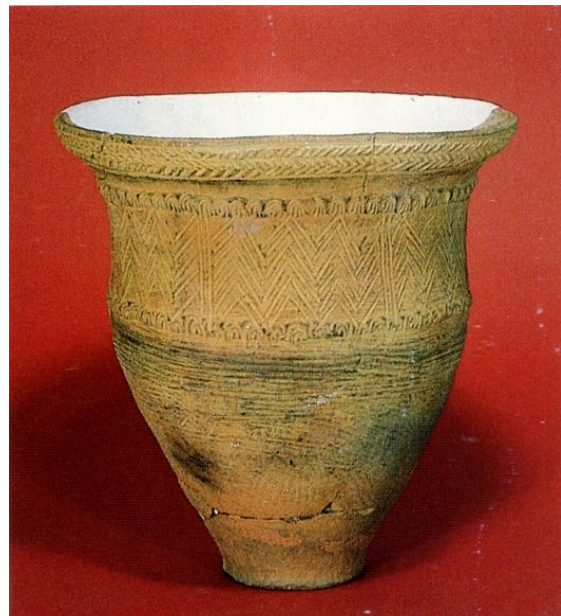
◆鎌倉幕府は、出羽国北部（現在の秋田県）から陸奥国北部（津軽・下北）を広く支配していた安藤氏に、「エゾ」との窓口となるよう命じました。交易も徴税も、安藤氏が担当したわけです（「蝦夷の沙汰」）。

◆室町時代に入ると、安藤氏には「日之本将軍」という地位が与えられ、「蝦夷の沙汰」政策はいっそう強化されました。その最前線となったのが、現在の青森県でした。特に、陸奥湾むつに面した「外浜」（読みは「そとがはま」または「そとのはま」。青森市

と東津軽郡を合わせた地域）は、津軽海峡への出口として重視されました。「外浜」という地名の由来は、「この世の果て」を意味する仏教用語「率土」です。当時の都の人々は、「外浜」を境にして別世界に行くものと考えていたようです。

◆このように中世の「外浜」は、異なる民族・文化との接点だったのです。シルクロードのオアシス都市がそうであったように、「外浜」にも様々な品物が集まり、交易がなされていたことでしょう。日本の中で見れば辺境である青森県も、異なる文化が接する土地と見れば、歴史上、たいへん重要な位置にあったということができるとです。

◆近年、考古学や歴史学の分野で研究が進み、「エゾ」が使用したものの、交易でもたらされたものが続々と発見されています。北海道で多く出土する擦文土器さつもんも、蓬田よもぎた小館遺跡こだてで優品が見つかっています。差別意識を乗り越え、新しい「エゾ」のイメージが描かれつつあります。



擦文土器（蓬田小館遺跡出土）